

# 日本教育方法学会

## 第52回大会プログラム

前日 9月30日(金)	14:00	大会校企画「公開授業研究会」(西南学院小学校)
	17:00	
	18:00	全国理事会(クリオコート博多)
	19:30	

第 一 日  10月1日(土)	8:30	受付開始								
	9:15	課題研究Ⅰ 授業のスタンダード化を問う —子どもの多様性の視点から—					課題研究Ⅱ 戦後教育実践と教育方法学(2) —「いじめ」問題とどう向き合ってきたか—			
	11:15									
	11:20									
	12:10	総 会								
	13:00	休 憩								
		自由研究 1	自由研究 2	自由研究 3	自由研究 4	自由研究 5	自由研究 6	自由研究 7	自由研究 8	自由研究 9
	15:40									
	15:50	公開シンポジウム 次期学習指導要領を問う —「コンピテンシー」と「教科の本質」を中心に—								
	18:20									
	18:30									
20:00	会 員 懇 親 会									

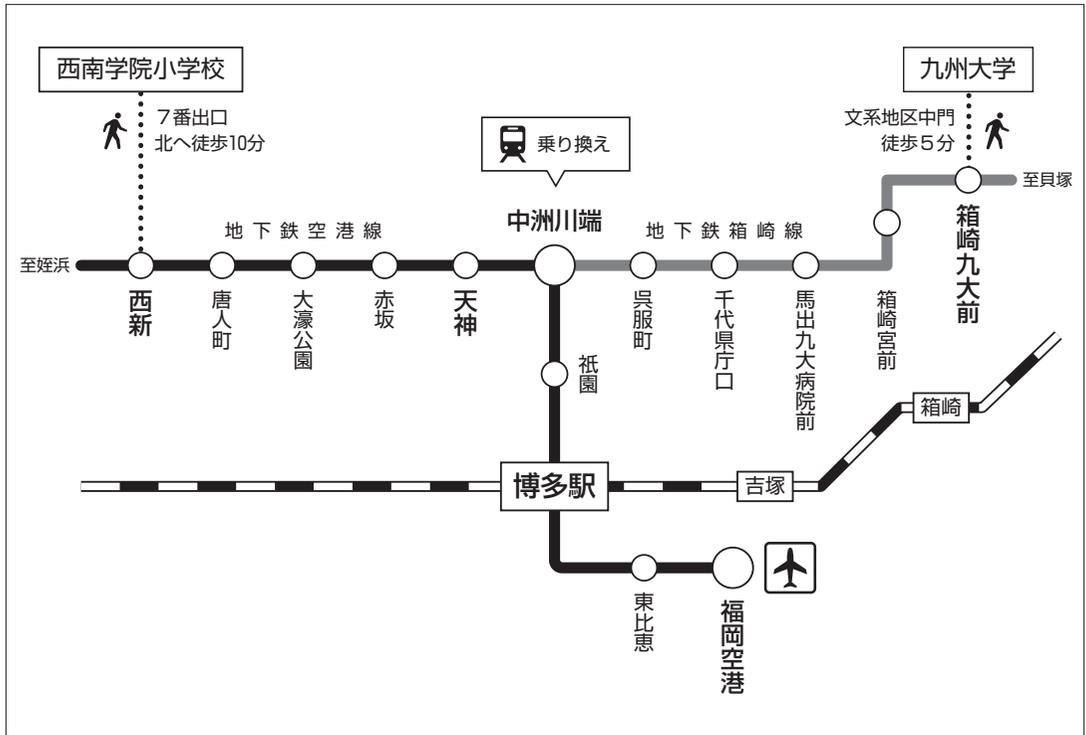
第 二 日  10月2日(日)	8:30	受付開始								
	9:00	自由研究 10	自由研究 11	自由研究 12	自由研究 13	自由研究 14	自由研究 15	自由研究 16	自由研究 17	自由研究 18
	12:10	休 憩								
	13:15	課題研究Ⅲ 学校教育で「政治的教養」をどう育てるか					課題研究Ⅳ 教師教育における事例研究の教育方法的検討 —「アクション・リサーチ」や「ケース・メソッド」の可能性と課題—			
	15:15									
	15:30	ラウンド テーブル ①	ラウンド テーブル ②	ラウンド テーブル ③	ラウンド テーブル ④	ラウンド テーブル ⑤	ラウンド テーブル ⑥	ワーク ショップ ①	ワーク ショップ ②	ワーク ショップ ③
	17:00									

2016年10月 1日(土)・10月 2日(日)  
於 九州大学

# 大会参加要領

1. **会場案内**：会場は、九州大学箱崎キャンパスです。会場への経路につきましては、次頁をご参照ください。
2. **受付**：両日ともに**8：30**からとなります。  
受付は学生係前で行います。
  - ・大会参加費（『大会発表要旨』代を含む）は、一般会員4,000円、学生会員3,000円です。
  - ・当日会員（臨時会員）もこれに準じて受け付けております。
  - ・本年度までの学会費（一般会員8,000円、学生会員6,000円）を未納の方は、あわせてお納めください。
  - ・本年度の学会費を納入された方には、受付にて『教育方法45』をお渡しします。
  - ・会員懇親会の参加受付も行いますので、ふるってご参加ください。会費は4,000円となっております。詳しくは、15頁の「インフォメーション」をごらんください。
  - ・受付にてネームプレートを用意しておりますので、お名前をお書きのうえ、おつけください。
3. **昼食**：土曜日は理農食堂（11:30～14:00）が営業しております。
4. **研究発表**：発表会場につきましては、4～5頁の「会場配置図」をご覧ください。
  - ・自由研究の発表時間は、以下の通りです。  
個人研究：発表20分 質疑10分  
共同研究：発表30分 質疑10分  
(但し、口頭発表者が1名の場合は、個人研究に準じます。)
  - ・自由研究における共同研究発表者の氏名にある○印は口頭発表者を表しています。

# 〈九州大学案内図〉



## 〈交通手段のご案内〉

### 〈九州大学へのアクセス〉

#### ● JR をご利用の方

JR 博多駅	地下鉄 空港線→箱崎線 「中洲川端駅」乗換え	→ 約15分 300円	「箱崎九大前駅」下車 徒歩 5分	タクシー 約20-30分 2,000-2,500円 箱崎キャンパス中門
	JR 鹿児島本線 「門司港行」2番線	→ 約5分 210円	「JR 箱崎駅」下車 徒歩15分	

#### ● 空路をご利用の方

福岡空港	地下鉄 空港線→箱崎線 「中洲川端駅」乗換え	→ 約21分 300円	「箱崎九大前駅」下車 徒歩 5分	タクシー 約20-30分 2,000-2,500円 箱崎キャンパス中門
------	------------------------------	----------------	---------------------	--

#### ● 高速バスをご利用の方

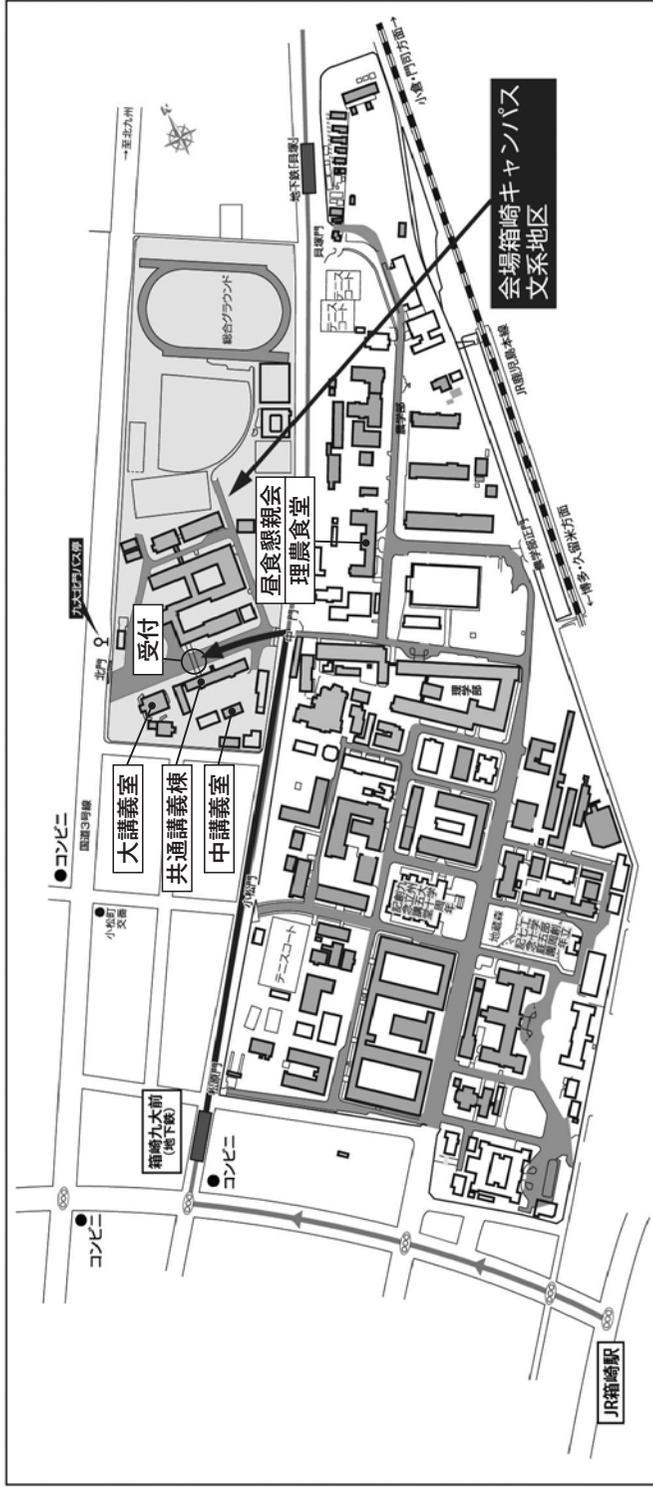
天神バスセンター	バス (徒歩 2分) 4・22・23・25・26番に乗車	→ 約20分 260円	「九大北門」下車 徒歩 1分
----------	---------------------------------	----------------	-------------------

#### ● 西鉄をご利用の方

西鉄福岡駅 (天神)	地下鉄	→ 約10分 260円	「箱崎九大前駅」下車 徒歩 5分
---------------	-----	----------------	---------------------

\* 西南学院小学校へのアクセスにつきましては、6頁をご覧ください。

# 〈会場配置図〉



## 会場配置

受付：学生係前  
 総会：中講義室  
 公開シンポジウム：大講義室  
 課題研究Ⅰ：中講義室  
 課題研究Ⅱ：共通講義棟201講義室  
 課題研究Ⅲ：中講義室  
 課題研究Ⅳ：共通講義棟201講義室  
 自由研究1・10：共通講義棟102講義室  
 自由研究2・11：共通講義棟103講義室  
 自由研究3・12：共通講義棟104講義室  
 自由研究4・13：共通講義棟202講義室

自由研究5・14：共通講義棟203講義室  
 自由研究6・15：共通講義棟204講義室  
 自由研究7・16：共通講義棟301講義室  
 自由研究8・17：共通講義棟302講義室  
 自由研究9・18：共通講義棟305講義室  
 ラウンドテアール①：共通講義棟102講義室  
 ラウンドテアール②：共通講義棟103講義室  
 ラウンドテアール③：共通講義棟104講義室  
 ラウンドテアール④：共通講義棟202講義室  
 ラウンドテアール⑤：共通講義棟203講義室  
 ラウンドテアール⑥：共通講義棟204講義室

ワークショップ①：共通講義棟301講義室  
 ワークショップ②：共通講義棟305講義室  
 ワークショップ③：共通講義棟302講義室

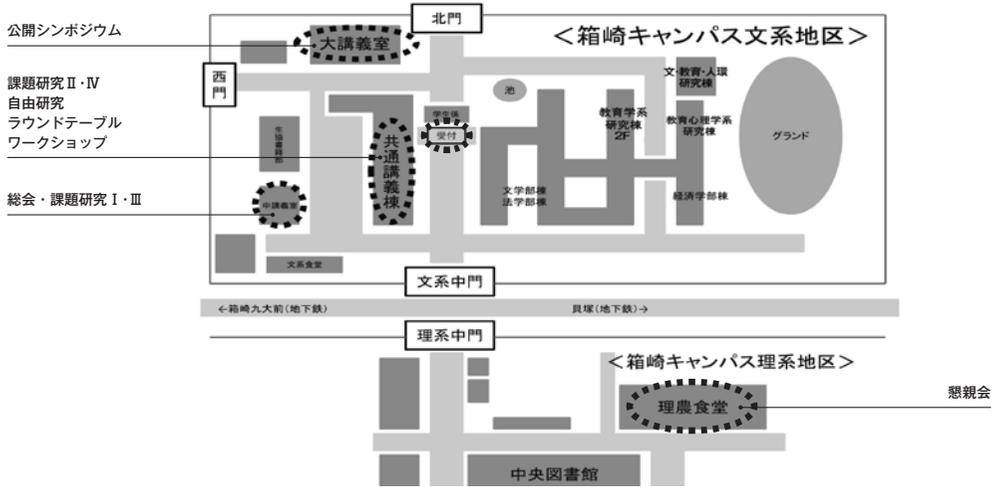
会員控室：共通講義棟101講義室

クローク：共通講義棟105講義室

事務局：共通講義棟207講義室

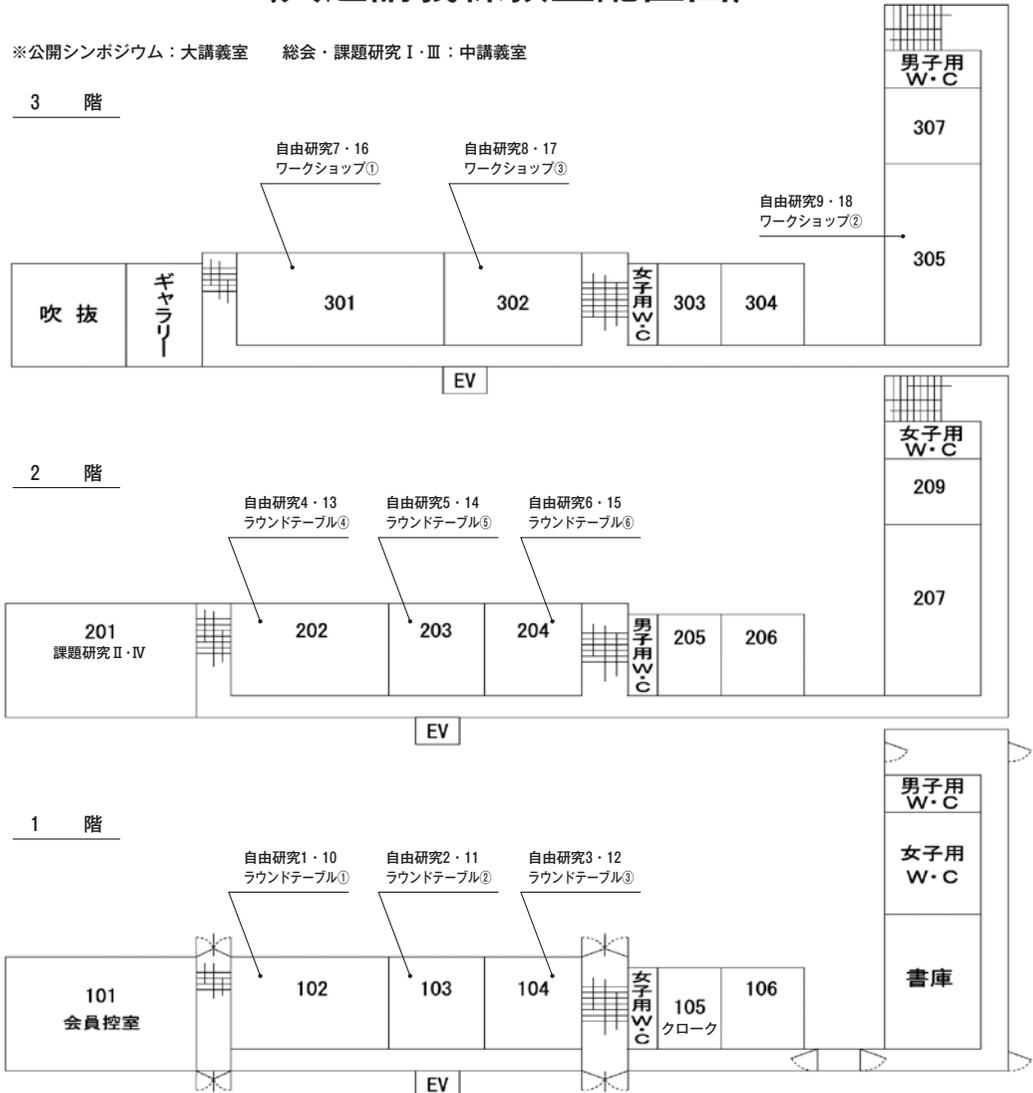
\* 会員懇親会の会場は、理農食堂です。

# 〈講義棟配置図〉



# 〈共通講義棟教室配置図〉

※公開シンポジウム：大講義室      総会・課題研究Ⅰ・Ⅲ：中講義室



9月30日(金) 14:00~17:00

## 大会校企画

# 西南学院小学校における公開授業研究会 — 児童理解に基づいたアクティブ・ラーニング授業の試み —

大会前日に、西南学院小学校において、公開授業及び研究協議会を行います。参加は無料、受け入れ人数は、各授業で20名程度となっております。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

### 〈参加申し込み〉

資料の用意等の関係から、9月16日(金)までに、日本教育方法学会事務局 hohojimu@riise.hiroshima-u.ac.jp へお申し込み下さい。ご連絡いただく必要事項は、ご氏名・ご所属・連絡先(住所・電話番号・mail address) 参加希望の授業、です。

### 〈プログラム〉

13:30~	受付	西南学院小学校玄関ホール
14:00~14:45	公開授業	1-A(生活科) 3-A(社会科) 4-A(国語科) 4-B(社会科)
15:00~15:50	学校の概要・沿革説明及び学校見学	(チャペル)
16:00~16:45	研究協議会	各授業の教室(参加者数によっては合同で行う場合もある)
16:50~17:00	全体会	(チャペル)

### 〈公開授業〉 \*単元名は予定

- 1-A 授業者 原口 創 (生活科) 単元名「あさがおのたねをうえよう」  
3-A 授業者 春藤 なぎ (社会科) 単元名「売る工夫 買う工夫」  
4-A 授業者 興津 あかり (国語科) 単元名「ごんぎつね」  
4-B 授業者 坂井 清隆 (社会科) 単元名「福岡地震発生」

※ビデオ・写真撮影はご遠慮願います。

### 〈研究・実施協力者〉

西南学院大学教授 田代裕一 九州大学教授 田上哲 西南学院大学准教授 川上具美

### ■西南学院小学校までのアクセス

住所 〒814-8513 福岡市早良区百道浜1丁目1番2号

TEL (092) 841-1600 FAX (092) 841-2277

HP <http://www.seinan.ed.jp/es/info/access.php>

※ご来校の際は、公共交通機関をご利用ください。

#### ○地下鉄の場合

地下鉄空港線西新駅下車(福岡空港から17分、博多駅から約13分、天神駅から約7分)

7番出入口より北へ徒歩約10分

#### ○西鉄バスの場合

西鉄バス300, 301系統 天神から都市高速経由(約15分) 西南中高前バス停下車すぐ

※さらに詳しい情報については、随時、学会ホームページ上でお知らせいたしますので、そちらをご確認ください。

10月1日(土) 9:15~11:15

課題研究 I

授業のスタンダード化を問う  
— 子どもの多様性の視点から —

(中講義室)

コーディネーター・司会者

田上 哲 (九州大学)

湯浅 恭正 (中部大学)

提案者

金井 香里 (武蔵大学) スタンダード化された教室における多様性への対応  
— 教師はニューカマーの子どもに対応できるのか —

永田 麻詠 (四天王寺大学) 性的マイノリティをめぐる授業のスタンダード化の課題

福田 敦志 (大阪教育大学) スタンダードとインクルージョンのあいだ

〈設定趣旨〉

日本各地の自治体の教育委員会や教育センター、また個別の学校で授業のスタンダードづくりが進められている。例えば、ねらいと問題の提示、課題の設定、問題の追究、発表、討論、まとめと振り返りといったように、どの教科でも使えるような授業の進行手順を一律に定めようとするものである。そして今、授業を含めて、学校の教育活動がスタンダード化の中で展開する傾向にある。

授業のスタンダードづくりは、「すべての子にとって分かりやすい授業づくり」を目指すいわゆるユニバーサル・デザインの考え方が影響していると考えられる。しかし、教室には様々な子どもたちがいる。授業のスタンダード化はその多様な子どものすべてにとってわかりやすい授業をつくり出すことになるのか、むしろ多様な子どもを学びから排除する、授業の画一化を一層進めることにならないのか。

本課題研究は、子どもの多様性の視点から、具体的には、発達障害の子ども、ニューカマーの子ども、LGBTの子どもの視点から理論的実践的に授業のスタンダード化を問い直すものである。

10月1日(土) 9:15~11:15

課題研究Ⅱ

戦後教育実践と教育方法学(2)

—「いじめ」問題とどう向き合ってきたか—

(共通講義棟2階201講義室)

コーディネーター・司会者

井ノ口 淳 三 (追手門学院大学)

折出 健 二 (人間環境大学)

提案者

折出 健 二 (人間環境大学) 「いじめ」問題の構図と教育方法学研究の課題

—子ども・青年の人格発達に焦点をあてて—

藤井 啓 之 (日本福祉大学) いじめの原因とその現れ方はどう変わってきたか

—子どもをとりまく文化変容に着目して—

田 淵 久美子 (活水女子大学) いじめへの対応と学校づくりの課題

—「修復」という視点を取り入れたときに見えるもの—

〈設定趣旨〉

2015年には戦後70年を機会に「戦後教育実践と教育方法学」を主題とする課題研究を企画し、「平和教育」について考察した。今年度は人権教育を大枠に考えることとし、特に「いじめ」問題について具体的に検討する。

報告の柱は、①これまで繰り返されてきた「いじめ」問題の構図やその研究の経緯をたどること、②「いじめ」を生みだす子ども文化の歴史的な流れについて、特にその暴力性・攻撃性に重点をおいて追求すること、③「いじめ」問題に取り組む実践と学校づくりの歩みを振り返り、今何が問われているかを考察すること、などである。

2013年6月に開催された第17回研究会でも「いじめ問題にどう取り組むか—教育方法学からのアプローチ—」を主題にしたが、本課題研究では、個別の事例を集中的に取り上げるのではなく、多くの事例を貫く問題について考察する。

10月1日(土) 13:00~15:40

自由研究1

(共通講義棟1階102講義室)

司会者：安彦忠彦(神奈川県立大学)  
中野和光(美作大学)

- 13:00 ① 近代教育課程成立期におけるフンボルトの Bildung 理論の位置  
宮本勇一(広島大学大学院)
- 13:30 ② コア・カリキュラム連盟における経験主義と本質主義  
—梅根悟と海後勝雄の対比に焦点を合わせて—  
中西修一朗(京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員)
- 14:00 ③ 教授学研究における「エビデンス」の位置価値に関する検討  
—ドイツにおける「可視化された学習」をめぐる議論を手がかりに—  
熊井将太(山口大学)
- 14:30 ④ 授業研究を“核”とする学校づくり  
—斎藤喜博と泡瀬小学校(沖縄)—  
狩野浩二(十文字学園女子大学)
- 15:00 ⑤ 社会科の初志をつらぬく会の授業研究  
的場正美(東海学園大学)

自由研究2

(共通講義棟1階103講義室)

司会者：池野範男(広島大学)  
柴田好章(名古屋大学)

- 13:00 ① 「抽出児中心型発言表」を用いたシティズンシップの明示化  
—小学校4年生社会科の授業において—  
坂井清隆(西南学院小学校)
- 13:30 ② 価値教育の理念に関する一考察  
—行為の選択基準としての価値意識に着目して—  
井上心(九州大学大学院)
- 14:00 ③ これまでの道徳を越える実践の研究  
—「特別の教科 道徳」をめぐる問題の検討を手がかりに—  
三浦研一(福岡教育大学附属福岡小学校)
- 14:30 ④ 表現活動における主権者教育考察  
—ヒーロー実践に見る学び論と関連して—  
上中良子(滋賀大学)
- 15:00 ⑤ 主権者意識育成の課題  
—授業プラン実践における教師と中学生の比較から—  
前田輪音(北海道教育大学)

10月1日(土) 13:00~15:40

自由研究3

(共通講義棟1階104講義室)

司会者：菅岡強司(熊本大学)  
田代高章(岩手大学)

- 13:00 ① 児童の協働的な学びを生み出す教員の力量形成の方法に関する研究  
—小学校若手教員の授業力向上のための研修システムの開発を通して—  
○前田康二(奈良教育大学)  
小柳和喜雄(奈良教育大学)
- 13:30 ② アクティブラーニングをめぐる教師研修の冒険  
青木幸子(昭和女子大学)
- 14:00 ③ Community Engaged Learning によるカリキュラム開発  
—文部科学省教育課程研究導入時における進路多様高等学校の変容—  
望月未希(東京都立多摩高等学校)
- 14:30 ④ フィンランド算数科学習指導におけるアクティブな活動の意義  
池野正晴(高崎経済大学)
- 15:00 ⑤ 能動的学習体験を統合化するカリキュラムデザインの検討  
—AL型教科学習と往還するPBL型総合学習のもたらすもの—  
広石英記(東京電機大学)

自由研究4

(共通講義棟2階202講義室)

司会者：三石初雄(帝京大学)  
三橋功一(北海道教育大学)

- 13:00 ① 生物多様性教育の教材開発研究  
—小学校における「みどり」の教育的意義と教育効果—  
長島康雄(関東学園大学)
- 13:30 ② 総合的な学習の時間の実践を生かした理科の単元開発  
—経験単元と教材単元との違いを考慮した理科の授業づくり—  
境野仁(上里町立七本木小学校)
- 14:00 ③ ヴェルドルフ学校の理科教育の思想的基盤  
—動物学の授業を中心に—  
本間夏海(日本大学大学院)
- 14:30 ④ 小学校算数教育における分離量と連続量の統一的指導原理の構築  
—量の動的認識に基づいて—  
中島淑子(愛知文教大学)
- 15:00 ⑤ 生物多様性教育の観点から見た学校植栽の位置と教育効果  
—教育課程経営の視点から—  
○小泉祥一(白鷗大学)  
長島康雄(関東学園大学)

10月1日(土) 13:00~15:40

自由研究5

(共通講義棟2階203講義室)

司会者：木原俊行(大阪教育大学)  
藤原幸男(沖縄キリスト教学院大学)

- 13:00 ① 授業における教師の実践的意思決定の多層性  
田中真帆(名古屋大学大学院)
- 13:30 ② 実践の省察を通じた教師の学習・発達に関する一考察  
—教師文化に着目して—  
吉永紀子(同志社女子大学)
- 14:00 ③ 協働学習における小学校教師の活動マネジメントの特徴  
—K. グランストロームのLeadershipとTeachershipの枠組みを援用した分析—  
児玉佳一(東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員)
- 14:30 ④ 教員養成でパフォーマンス評価を用いる際の問題構造に関する研究  
—米国edTPAの論議と日本の教員養成における取組を通じて—  
小柳和喜雄(奈良教育大学)
- 15:00 ⑤ 参加型教員研修「Round Study」効果の検証と課題  
—教師の語り言葉に着目して—  
原田三朗(愛知県豊川市立一宮南部小学校)

自由研究6

(共通講義棟2階204講義室)

司会者：小川博久(東京学芸大学名誉教授)  
子安潤(愛知教育大学)

- 13:00 ① P. フレイレの初期教育思想形成に関する一考察  
佐藤雄一郎(広島大学大学院)
- 13:30 ② ASEANの地域社会的文脈における科学教育  
—文化的応答性のある学級づくりと授業編成—  
馬場智子(岩手大学)
- 14:00 ③ イギリスにおける「ドラマ・イン・エデュケーション(drama in education)」をめぐる批判と展開  
渡辺貴裕(東京学芸大学)
- 14:30 ④ 学習方法としての「演出」  
—演劇を学ぶ学生は「高齢者」をいかに捉えたか—  
園部友里恵(三重大学)

10月1日(土) 13:00~15:40

自由研究7

(共通講義棟3階301講義室)

司会者：赤星まゆみ(西九州大学)  
西岡けいこ(香川大学)

- 13:00 ① 保護者の園活動への参加の意義  
—私立M幼稚園における事例を通して—  
及川留美(東京未来大学)
- 13:30 ② 自由と多様な選択肢が保障された環境が子どもの成長に与える影響  
—フリースペースの事例から—  
岡部瑛美(東京大学大学院)
- 14:00 ③ 穴 hollow 研究で見えること1  
—「いる・いない」の場は主体形成の原点である—  
伊澤貞治(皐月幼稚園)
- 14:30 ④ 乳幼児の教育に対応できる保育教諭の養成について  
—今後の養成校の教育内容はどうか—  
○栗原泰子(東京学芸大学), 野尻祐子(横浜創英大学)  
細井香(東京家政大学)
- 15:00 ⑤ 在籍学級とつなぐ日本語初期指導プログラムの提案  
—群馬県伊勢崎市の取り組み事例—  
○小池亜子(国士舘大学), ○古川敦子(大阪教育大学)

自由研究8

(共通講義棟3階302講義室)

司会者：黒田耕司(北九州市立大学)  
田端健人(宮城教育大学)

- 13:00 ① PISA 以降の一般陶冶 (Allgemeinbildung) 論における学校の役割規定  
—ベンナーによる陶冶—コンピテンシー二元論克服の試みを通して—  
田中 怜(筑波大学大学院)
- 13:30 ② 公共的コミュニケーションとしての話し合い活動の可能性  
—小学6年生国語「海の命」の解釈過程の分析—  
桒 嵩 志 保(名古屋大学大学院)
- 14:00 ③ 授業における規律指導と自己規律の形成に関する一考察  
—コルン (Korn C.) による Disziplin の問題史的考察を手がかりに—  
早川知宏(広島大学大学院)
- 14:30 ④ 現代ドイツの授業におけるグループの検討  
吉田茂孝(大阪教育大学)
- 15:00 ⑤ 「正統的周辺参加」論からの異年齢集団活動の意義の問い直し  
小野沢 美明子(日本大学・非常勤講師)

10月1日(土) 13:00~15:40

自由研究9

(共通講義棟3階305講義室)

司会者：藤本和久(慶應義塾大学)  
三村和則(沖縄国際大学)

- 13:00 ① 看護科の教科指導に関する一考察  
—薬理学分野の単元構成試案を通して—  
鶴田百々(九州大学大学院)
- 13:30 ② 教育現場と教育実習課題に取り組める教職科目(実践的指導力育成)に関する実践研究  
—私立理系大15年〈学生主体の学習(グループ学習・授業研修含)〉推進の意義・課題から—  
小島勇(東京電機大学)
- 14:00 ③ 教科専門科目と教科教育法の融合の枠組みとその実践  
—音楽科の場合—  
衛藤晶子(畿央大学)
- 14:30 ④ 教育実習後の学生による授業分析及び省察に関する実践研究  
—授業アーカイブシステムを活用して—  
藤井佑介(長崎大学)
- 15:00 ⑤ 教職大学院におけるアクション・リサーチに関する一考察  
—Ed.D.の視点からの問題提起—  
倉本哲男(愛知教育大学)

10月1日(土) 15:50~18:20

公開シンポジウム

## 次期学習指導要領を問う

—「コンピテンシー」と「教科の本質」を中心に—

(大講義室)

コーディネーター・司会者

阿部 昇 (秋田大学)

西岡 加名恵 (京都大学)

提案者

石井 英真 (京都大学) コンピテンシー・ベースのカリキュラムをどう捉えるか  
— 知の総合化と統合的な学びの追求へ —

松崎 正治 (同志社女子大学) コンピテンシーと国語科の本質  
— 国語教育史の視点から —

大野 栄三 (北海道大学) コンピテンシー重視か、ディシプリン重視か  
— 理科教育における有能さと学問領域の関係 —

〈設定趣旨〉

次の学習指導要領改訂に向けて、「コンピテンシー（資質・能力）」を重視する方向性が示されている。その背後には、OECDによるキー・コンピテンシーの提案や、米国やオーストラリアでの21世紀型スキルの議論などの影響があると言える。「コンピテンシー」を重視する方向性には、変化の激しい社会を生きていく上で必要となる力を保障する可能性を高めることが期待されている半面、経済社会の論理に教育が従属する危険性がある。また教科内容についての解明が曖昧なままにされていく危惧もある。

本シンポジウムでは、まず、学力研究の蓄積を踏まえ、カリキュラムにおいて「コンピテンシー」をどう位置づけることができるのかについて提案いただく。また、国語科教育・理科教育の立場から、「コンピテンシー」重視の方針と「教科の本質」を踏まえた教科教育とを両立することができるのかについて、検討いただく。

# インフォメーション

## ●会員総会

日 時 : 第一日(10月1日(土)) 11:20~12:10  
会 場 : 中講義室  
主な議題 : 会務報告  
2015年度決算  
2017年度予算案  
次期大会校

昼食・休憩前ですが、ぜひとも多数ご参集ください。

## ●会員懇親会

日 時 : 第一日(10月1日(土)) 18:30~20:00  
会 場 : 理農食堂  
会 費 : 4,000円

会員相互の親睦をはかるため、懇親会を開きます。多数の会員のみなさまのご参加をお願いいたします。

## ●書籍販売について

学会事務局では、受付にて学会機関誌『教育方法』、研究紀要『教育方法学研究』、『大会発表要旨』の最新刊およびバックナンバーを、大会割引価格で販売いたします。この機会にぜひお求めください。

なお、『教育方法』最新刊(第45巻)は、本年度の学会費を納入された方には、受付の際にお渡しいたします。大会以降に学会費を納入された方には、随時お手元に郵送いたしております。

10月2日(日) 9:00~12:10

自由研究10

(共通講義棟1階102講義室)

司会者：市川博(横浜国立大学名誉教授)  
樋口直宏(筑波大学)

- 9:00 ① 小学校社会科教師として形成した授業構成員  
—教職7年目から16年目の有田和正氏の場合—  
中島常彦(広島大学大学院)
- 9:30 ② 人生についての語りを友だちと共有することの意味  
—高校三年生による「人生すごろく」作成の実践をもとに—  
保坂裕子(兵庫県立大学)
- 10:00 ③ 学校における主権者育成の実践上の問題とその克服  
—副教材配布によって明らかになった課題をふまえて—  
桑原敏典(岡山大学)
- 10:30 ④ 初期池袋児童の村小学校における学習者主体教育2  
出雲俊江(筑紫女学園大学)
- 11:00 ⑤ 現実の文脈から真真正市民的資質を育成する社会科パフォーマンス課題の実践的検討  
—学習のための評価論に依拠した小中一貫校での実践を手がかりに—  
○豊 啓 司(福岡教育大学), ○柴 田 康 弘(飯塚市立小中一貫校)

自由研究11

(共通講義棟1階103講義室)

司会者：小柳和喜雄(奈良教育大学)  
久米弘(九州大学)

- 9:00 ① 「思考ツール」を用いたアクティブ・ラーニングによる「深い学び」の実現とその考察  
安谷元伸(滋賀大学教育学部附属中学校)
- 9:30 ② 日本における視聴覚教育の理論的系譜  
—西本三十二による視聴覚教育の構想—  
邊見信(東京大学大学院)
- 10:00 ③ ヴァルネラビリティからレジリエンスへ「学びの映像論的転回」I  
—「映像メディアによる表現」の位相と意義—  
柳沼宏寿(新潟大学)
- 10:30 ④ 教職課程授業におけるタブレットPCの活用に関する実践研究  
—テキストとノートの2画面機能の活用—  
小林祐一(沖縄女子短期大学)
- 11:00 ⑤ 教師視点の映像記録を活用した授業実践能力育成支援の試み  
○平山勉(名城大学), 後藤明史(名古屋大学)  
竹内英人(名城大学)
- 11:30 ⑥ 授業づくりにおける教科書読解活動の検討  
三橋功一(北海道教育大学)

10月2日(日) 9:00~12:10

自由研究12

(共通講義棟1階104講義室)

司会者：豊田 ひさき (中部大学)  
藤村 宣之 (東京大学)

- 9:00 ① 授業会話におけるトラブルの修復実践再考  
—「他者開始修復」に焦点化して—  
森 一平 (帝京大学)
- 9:30 ② 教授場面における会話の進め方の特徴  
—授業の相互行為分析の知見から—  
五十嵐 素子 (北海学園大学)
- 10:00 ③ 対話による知識の共同構築過程における形成的評価の視点  
—アクティブラーニング改善のための集団思考評価と指導評価—  
水野 正朗 (愛知文教大学)
- 10:30 ④ ナラティブ・ラーニングの試み  
—ケース2「生命倫理学」—  
安林 奈緒美 (中部大学・非常勤講師)
- 11:00 ⑤ 国語科の単元的な学びとアクティブラーニング  
—教師の働きの変化をとらえる—  
今宮 信吾 (プール学院大学)

自由研究13

(共通講義棟2階202講義室)

司会者：鹿毛 雅治 (慶應義塾大学)  
白石 陽一 (熊本大学)

- 9:00 ① 授業における子どもの「経験のプロセス」に関する基礎的考察  
—記述方法に焦点を当てて—  
茂見 剛 (九州大学大学院)
- 9:30 ② 教室談話の解釈妥当性を高める分析枠組みの検討  
—Hallidayの選択体系機能言語学を使った試み—  
稲永 亮 (東京大学大学院)
- 10:00 ③ 授業分析によるカリキュラム評価の試み  
—授業実践の様相—解釈的研究—  
田代 裕一 (西南学院大学)
- 10:30 ④ 子どもの哲学 (p4c) ハワイスタイルの精神療法的効果  
—対話による探究のコミュニティの現象学的省察—  
田端 健人 (宮城教育大学)
- 11:00 ⑤ 教材解釈過程の多様性の解明による物語の授業評価参照枠の開発  
中道 豊彦 (愛知県立半田高等学校)
- 11:30 ⑥ 「学級経営」概念と授業に関する考察  
八木 秀文 (安田女子大学)

10月2日(日) 9:00~12:10

自由研究14

(共通講義棟2階203講義室)

司会者：竹内元(宮崎大学)  
渡辺貴裕(東京学芸大学)

- 9:00 ① 女性教師の志望動機とロールモデル  
—昭和50年代に教壇に立った教師たちのライフヒストリーと語られた写真—  
滝川弘人(東京大学大学院)
- 9:30 ② Instructional Rounds における授業分析法の試行と評価  
○廣瀬真琴(鹿児島大学), 木原俊行(大阪教育大学)  
森久佳(大阪市立大学), 宮橋小百合(和歌山大学)  
深見俊崇(島根大学)
- 10:00 ③ 福井県の授業研究実施体制の分析  
—Hargreaves の Professional Capital を基に—  
千々布敏弥(国立教育政策研究所)
- 10:30 ④ 20世紀初頭の米国の教師と教授理論家  
—2人の女性教師と C. A. マクマリーの関係に焦点を当てて—  
藤本和久(慶應義塾大学)
- 11:00 ⑤ ノーレッジマネジメントと現職研修に関する実践的研究  
○久保裕一(愛知教育大学大学院), ○小室武(愛知教育大学大学院)  
倉本哲男(愛知教育大学)

自由研究15

(共通講義棟2階204講義室)

司会者：松下佳代(京都大学)  
三橋謙一郎(徳島文理大学)

- 9:00 ① UOI 探究学習における自己評価ルーブリックの検討  
—「総合的な学習の時間」(小学校)における Reflection Card に焦点をあてて—  
鄭谷心(東京学芸大学)
- 9:30 ② 「教育評価」の課題  
—大規模学力調査を事例として—  
川口俊明(福岡教育大学)
- 10:00 ③ 高次の学力における評価の方法に関する一考察  
—アクティブ・ラーニングの学習成果を評価するために—  
北川剛司(奈良教育大学)
- 10:30 ④ 動画分析ツール「VVCex」を用いた動画分析による動画リテラシー獲得効果  
○森本洋介(弘前大学), 森田英嗣(大阪教育大学)  
松本寿一(梅花女子大学)
- 11:00 ⑤ 比較授業分析による授業実践の文化的基底の多面的検討  
— A synthesis research を中心に—  
○坂本篤史(福島大学), ○柴田好章(名古屋大学)  
○サルカール・アラニ・モハメッド・レザ(名古屋大学)

10月2日(日) 9:00~12:10

自由研究16

(共通講義棟3階301講義室)

司会者：秋田喜代美(東京大学)  
小泉祥一(白鷗大学)

- 9:00 ① 小学校体育科・バスケットボールにおけるバスの指導に関する事例研究  
ータブレット端末の活用をめぐってー  
○岩本玲希(武庫川女子大学大学院), 田中新治郎(武庫川女子大学)
- 9:30 ② Service-Learning からみる防災教育の実践的研究  
○西弘満(愛知教育大学大学院), 倉本哲男(愛知教育大学)
- 10:00 ③ ダリル・シーデントップの体育理論に関する一考察  
ープレイ体育論とスポーツ教育論の関係に焦点を合わせてー  
徳島祐彌(京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員)
- 10:30 ④ 初任者指導における指導のタイミングに関する研究  
ー体育授業場面の推移パターンに着目した示範授業の検討ー  
梶井大輔(プール学院大学)
- 11:00 ⑤ 里山・里海・伝統知と持続可能な未来のための防災教育  
若菜博(札幌国際大学)
- 11:30 ⑥ 被災地外の大学で学生と東日本大震災の学習プランをつくる  
ー非当事者性とどう向き合うかー  
佐藤年明(三重大学)

自由研究17

(共通講義棟3階302講義室)

司会者：園田貴章(佐賀大学)  
高田清(安田女子大学)

- 9:00 ① 子どもの発言を基に構成される授業の分析  
ー単元を通じた個の思考の変容課程とその要因を中心にー  
○付洪雪(名古屋大学大学院), 副島孝(愛知文教大学)  
柴田好章(名古屋大学)
- 9:30 ② 知能のPASS理論に基づくアセスメントと支援の実践的展開  
ー学習の「問題」の発見による障害理解に着目してー  
松尾奈美(広島大学大学院・日本学術振興会特別研究員)
- 10:00 ③ 教師による権威性の自己提示  
ー児童を課題に取り組ませるための言葉かけの多様性からー  
川島哲(東京大学大学院)
- 10:30 ④ 特別支援学級における対話的教育の実践  
ー教育課程における特徴とその内容からー  
荒卷恵子(帝京大学)
- 11:00 ⑤ 「第三の空間」の成立につながる小学校教師の学級経営観  
ー2年生国語科授業における音読場面に着目してー  
笹屋孝允(三重大学)
- 11:30 ⑥ 教師の仕事と授業に関する調査結果から  
子安潤(愛知教育大学)

10月2日(日) 9:00~12:10

自由研究18

(共通講義棟3階305講義室)

司会者：的場正美(東海学園大学)  
大元千種(筑紫女学園大学)

- 9:00 ① 授業における媒介 (Vermittlung) に関する教授学的検討  
松田 充 (広島大学大学院)
- 9:30 ② ヴィゴツキーの最近接発達領域概念の形成過程に関する検討  
岡花 祈一郎 (福岡女学院大学)
- 10:00 ③ 解放的教育学と「教育への勇気」  
—ブレツィンカ (W. Brezinka) の議論を参照して—  
牛田 伸一 (創価大学)
- 10:30 ④ 保育施設における遊び集団の凝集性はいかにして生成するか  
—「遊び保育論」の批判的検討—  
○小川 博久 (東京学芸大学)  
○岩田 遵子 (東京都市大学)

10月2日(日) 13:15~15:15

課題研究Ⅲ

学校教育で「政治的教養」をどう育てるか

(中講義室)

コーディネーター・司会者

片上宗二(安田女子大学)

久野弘幸(名古屋大学)

提案者

釜本健司(新潟大学) 日本における政治的教養の育成とその方法

—社会系教科の歴史的展開を手がかりとして—

吉村功太郎(宮崎大学) 民主主義社会の市民としての政治的教養育成論の現状と課題

藤瀬泰司(熊本大学) 批判的リテラシーを育てる公民学習の授業開発

—「日常的なことは政治的である」という世の中の  
見方の育成に向けて—

〈設定趣旨〉

本年夏に実施される参議院選挙から、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、高校生を含めた若い世代の投票が実施される。そこで問われてくるのが、若者の持つ「政治的教養」の質である。「政治的教養」とは、政治的判断力や批判力ともいうことができよう。今日的表現で言えば、“政治的リテラシー”である。

では、民主主義社会を担う主権者としての国民に求められる「政治的教養」を現代社会に即して言うとは、具体的には、どのような内容・方法を通して育成されるものであるのか。また、「政治的教養」と資質・能力、技能とはどのような関係にあるのか。そして、そのような「政治的教養」を育むためには、学校教育とりわけ社会系教科の教育はどうあるべきか。

高校生へのアンケート調査を見ると、選挙そのものへの関心が低いばかりか、どのように判断すればよいかわからないといった声も多い。そのような点を考えると、「政治的教養」は、高校段階で身に付けるべきものと考えられるべきではないであろう。むしろ、小学校段階から徐々に、しかし、しっかりと育てていく必要があると考えられる。高校生に突き付けられた喫緊の課題を踏まえて、提案者には、社会系教科を中心に、具体的な方策をお示しいただき、議論を深めていきたい。

10月2日(日) 13:15~15:15

## 課題研究Ⅳ

# 教師教育における事例研究の教育方法的検討

—「アクション・リサーチ」や「ケース・メソッド」の可能性と課題—

(共通講義棟2階201講義室)

コーディネーター・司会者

深澤 広明 (広島大学)

藤江 康彦 (東京大学)

提案者

木村 優 (福井大学) 教師の意思決定資本を培う事例研究

—「専門職の資本」による教師教育の方向定位と  
実践事例に基づいて—

竹内 伸一 (徳島文理大学) ケースメソッド教育という難課題

—ビジネス教育での成果と反省から—

姫野 完治 (北海道大学) 教師の学びにおいて実践の対象化はどのような意味を持つのか

〈設定趣旨〉

近年、大学院を中心として、事例研究を中核とした教師教育カリキュラムづくりが進んでいる。これは、中央教育審議会において、教職に求められる高度な専門性を育成するためには、学校教育における理論と実践との融合を強く意識した体系的な教育課程を編成することが必要であるとされ、「理論と実践の融合」を、事例研究（学校における実習）において果たすよう定められたことによる。「理論と実践の融合」を志向するこのカリキュラムは、「反省的实践家」としての教師像が提起され共有されるなかで、省察と判断の教育による専門性開発の実質化としての「アクション・リサーチ」や「ケース・メソッド」を理論的方法論的基盤としている。事例研究を中核としたカリキュラムに対しては一定の成果が認められるとの評価もある反面、とりわけ、若い教師たちにおいて教科指導に係る能力（教える内容についての深い理解力や学問的探究への志向）や基礎学力（文書を作成する力や幅広い教養等）が弱まっているとの声も聞かれる。そこには、教師教育カリキュラムの開発において、事例研究が有効にはたらくための学習者側の要件、「理論」や「実践」の概念規定や両者の関係性、実践的知識の前提、教育学諸理論に関する専門科目と事例研究の関係、コースワークのあり方などについて、十分な議論がないままに実践が先行している現状があるのではない。

本課題研究では、教師教育の現場で「アクション・リサーチ」や「ケース・メソッド」が有効にはたらくための前提について論議することを通して、事例研究の可能性と課題を明らかにしていきたい。

10月2日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル①

## インクルーシブ授業論の今日的課題

(共通講義棟1階102講義室)

企画者

湯 浅 恭 正 (中 部 大 学)

司会者

吉 田 茂 孝 (大 阪 教 育 大 学)

提案者

新 井 英 靖 (茨 城 大 学)

稲 田 八 穂 (筑 紫 女 学 園 大 学)

〈設定趣旨〉

特別支援教育の制度開始から10年目を迎えて、通常学校・学級における特別なニーズのある子どもへの支援と共同を軸にしたインクルーシブ授業論で何が問われているのか、今日的な課題の整理が必要である。これまで、主に障害のある子どもを対象にしたインクルーシブ授業の在り方、またインクルーシブ授業の基盤としての学級づくりや学校づくりの在り方、主に初等教育を中心にしたインクルーシブ授業の在り方などが議論されてきた。

こうした議論とともに、一つは、特別なニーズのある子どもの対象を問い直し、外国籍の子ども等を含む授業づくりの在り方が問われるべきである。いわゆる障害のある子どもへの支援と共同を探究してきた論理をどう援用できるのか、それとは相対的に独自の論理に光を当てることによって、インクルーシブ授業の構造と展開にどのような展望が開けるのかが問われている。二つには、初等教育段階のインクルーシブ授業論の蓄積を踏まえつつ、中等教育における授業づくりの課題を析出することが問われている。発達論的検討や教科教育論を視野に入れつつ、ほとんど未解明の分野ともいえる中等教育でのインクルーシブ授業の姿を問いたい。

本ラウンドテーブルでは、こうした課題に対して、臨床的に関与してきた会員の提案—JSLの子どもを対象にしたインクルーシブ授業、中学校におけるインクルーシブ授業—を基にして、インクルーシブ授業論の今日的な課題を探究する。障害者の権利条約等の動向から、学校における「合理的配慮」論の在り方、そして特別なニーズのある子どものカリキュラムの在り方等を念頭に置きつつ、それらが学校教育の中心領域である授業論にどう結びつき、権利としての学びの保障につながる授業論をどう構築できるのか、本テーブルの参加者とともに議論する。

10月2日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル②

## 市民性教育の新たな実践研究(2)

— 18歳選挙権時代に地域と学校をつないで主権者を育てる —

(共通講義棟 1階103講義室)

企画者

桑原敏典(岡山大学)

吉村功太郎(宮崎大学)

川口広美(滋賀大学)

提案者

蓮見二郎(九州大学)

古田雄一(大阪国際大学)

田本正一(佐賀市立高木瀬小学校)

〈設定趣旨〉

本ラウンドテーブルは、2014年の第50回記念大会で開催した「市民性教育の新たな実践研究のためのキックオフミーティング」からの継続となる。今回は、今年の夏、改正公職選挙法の施行により実現した18歳選挙権にあわせて注目されている主権者教育のあり方をテーマとする。

18歳選挙権の時代を迎え、主権者教育に注目が集まっている。しかし、学校現場の受け止め方は様々である。生徒の政治参加を促すために積極的に取り組もうとしているところもあれば、政治的中立性の確保や高校生の政治的活動のあり方にかかわる問題から躊躇しているところもある。その一方で、学校外での主権者教育は、行政やNPOなど多様な主体によって実に積極的に進められている。選挙管理委員会やNPO団体が主体となって選挙に関わるイベントが開催されたり、高校生自身が運営の主体となって選挙について考えるフォーラムが実施されたりしている。そこでは、SNSなどのネットワークが駆使され、人と人とのつながりが選挙をきっかけに拡大している。このように、一見活発に見える学校外の主権者教育も、その社会的影響や実際の効果、さらには今後の持続性については未知数である。しかし、いずれにしてもこのような学校の中と外の動きが連携していくことは必要であろう。主権者教育が、社会や政治に積極的に関わる市民を育てることを目指すならば、社会と学校が連携をして開かれた市民性教育を展開することは不可欠ではなかろうか。

本ラウンドテーブルでは、上記のような問題意識にもとづいて、企画者と報告者が現在各地で展開されている主権者教育の状況を報告したうえで、主権者教育を通して社会と学校をいかにつないでいくかということについて、市民性教育の観点からの議論を深めていきたいと考えている。主権者を育てるという観点から学校教育を見直すこのような取り組みは、教育方法学会の会員にとっても意義あるものとなるのではないかと。

10月2日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル③

## 教育方法の視点から学校図書館を考える

(共通講義棟1階104講義室)

企画者

鎌田和宏(帝京大学)  
野口武悟(専修大学)

提案者

鎌田和宏(帝京大学)  
野口武悟(専修大学)  
永利和則(元小郡市図書館長)

〈設定趣旨〉

本年2016年は学校図書館年である。国内では全国学校図書館研究大会が神戸で開催され、国際学校図書館協会の年次大会が東京で行われる。1953年に学校図書館法が制定され、60年余が経過する。同法によれば学校図書館は「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備」とされ、必置であり「学校教育の教育課程の展開に寄与する」とされてきた。学校内に設置される「設備」として固有の法をもち、期待されてきた存在である。

現在学習指導要領の改訂が議論され、教育方法の改善が課題となり議論されている。そこで話題となっているアクティブ・ラーニングは、高等教育の議論の中では学習環境の改善が必須であり、大学図書館が中心となりラーニング・コモンズの設置・活用でそれに対応しようとしている。現行学習指導要領においても総合的な学習の時間において探究方の学習が求められており、それを支援するものとして学校図書館が位置づけられている。初等・中等教育でも当然学校図書館の学習者支援、授業支援が検討されるべきであろう。事実、いくつかの自治体では学校図書館を活用した授業づくりや学習者支援の動きが始まっている。個に応ずる教育、特別な教育的ニーズに応える教育を実践する基盤としても注目されてきている。

教育方法的視点から考えても極めて重要な位置を占めると考えられる学校図書館であるが、本学会では残念ながらその意義や機能が適正に位置づけられ検討されてこなかったのではないかと。例えば本学会50周年を記念して出版された『教育方法学研究ハンドブック』には、教材やメディア、学習環境等の項があるのにもかかわらず学校図書館に関する項がない。

本ラウンド・テーブルでは学校図書館の利活用に取り組み鳥取県や島根県等の先進事例を紹介しつつ、学校図書館がもつ教育的な意義や機能について、教育方法の視点から検討したい。

10月2日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル④

## 演劇的知の教育方法的検討(4)

— シティズンシップ教育と演劇的知 —

(共通講義棟2階202講義室)

企画者

渡部 淳(日本大学)

司会者

深澤 広明(広島大学)

提案者

池野 範男(広島大学)

渡部 淳(日本大学)

共同研究者

三橋 謙一郎(徳島文理大学), 武田 富美子(立命館大学)

青木 幸子(昭和女子大学), 宮崎 充治(桐朋小学校)

和田 俊彦(跡見学園高校), 宮原 順寛(北海道教育大学)

渡辺 貴裕(東京学芸大学), 中野 貴文(東京女子大学)

藤井 洋武(日本大学)

〈設定趣旨〉

第1期のラウンドテーブル「教育方法のトポロジー」では、“ドラマワーク”を主なキーワードとして、教育における演劇的手法の活用可能性を5年間にわたって検討した。

第2期では、“演劇的知”をキーワードとした新たな研究に着手している。今回は、シティズンシップ教育と演劇的知の関わりについて検討する。

日英の双方でシティズンシップ教育とドラマ教育を架橋する研究が進展し、その中間的な総括が、I. デービス教授(ヨーク大学)を中心として2015年に編まれた論考、'Putting the case for building a bridge between drama and citizenship education', *Citizenship Teaching & Learning*, 10-3にまとめられている。

本セッションでは、この共同研究の経過を振り返るとともに、18歳選挙権導入にともなう主権者教育の模索やユネスコによるGCEDの提唱など、さまざまな市民像がダイナミックに交錯する現状をみすえて、新しい市民像と演劇的知の関係を探ることにしたい。

本ラウンドテーブルにこれまで参加したことのない会員のみなさまの参加も歓迎いたします。

10月2日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル⑤

プロジェクト学習を成立させる教師の実践知とは何か

(共通講義棟2階203講義室)

企画者

秋田 喜代美 (東京大学)  
村瀬 公胤 (東京大学)

司会者

秋田 喜代美 (東京大学)

提案者

上田 優人 (和歌山県立日高高等学校)  
田中 一也 (和歌山県立日高高等学校)  
加藤 賢一 (広島県教育委員会)  
村瀬 公胤 (東京大学)

指定討論者

小柳 和喜雄 (奈良教育大学)

〈設定趣旨〉

次期学習指導要領の策定が進む中、アクティブ・ラーニングについての関心が高まっている。国際的にも、「21世紀型スキル」やOECDの「Education 2030」等々の議論では、知識観、学習観の転換が求められており、教育方法の革新への期待が高まっている。安定した知識体系を伝達・継承する学習だけではなく、問いに対して子どもたちが主体的かつ協同的に解決を見いだしていく学習にも対応できる教師の実践知とは、どのようなものであるだろうか。

これまででも、総合的な学習の時間の実践などを通して、問題解決型の学習をデザインし、支援促進するファシリテーターとしての教師の役割が、語られるようになってきている。さらにアクティブ・ラーニングにおいては、問いそのものを子どもたちが発見することから始まるプロジェクト学習(PBL)へと、学習の構造的変革が行われようとしている。本ラウンドテーブルでは、これら革新的なプロジェクト学習を構想し、実践するための教師の実践知とは何かについて、中等教育の学校教育に焦点を当てOECD日本イノベーション教育ネットワーク(Japan Innovative Schools Network supported by OECD)の事例をふまえて対話したい。

まず、高校でPBLを指導・支援している実践者の立場から、高校生たちの学びのプロセスに寄り添うことでどのような実践的知識や智慧が新たに見出されたのか、そして自身の役割をどのように捉え直しているのか、経験に基づく話題が提案される。

つぎに、PBLを実施している複数の高校を支援し、学びの変革を実行している教育委員会の立場から、PBLと向き合った教師たちの困難とその克服についての話題や、地域社会と学校を結ぶPBL実践を通して生じた教師の意識の変化などの話題が提案される。

さらに、これらの実践をふまえながら、実践知の転換の意義と課題について、理論的また実証的な立場から話題が提案される。

最後に、教員養成並びに現職教育の立場から、PBLにおいて教師の実践知のイノベーションの可能性について、展望を伺うとともに、フロアへと対話を開きたい。

10月2日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル⑥

## 高等学校におけるアクティブ・ラーニング型授業の展開

— 全国実態調査のデータと個別の事例から —

(共通講義棟2階204講義室)

企画者

山 辺 恵理子 (東京大学 大学総合教育研究センター 特任研究員)

司会者

田 中 智 輝 (東京大学 大学総合教育研究センター 特任研究員)

提案者

木 村 充 (東京大学 大学総合教育研究センター 特任研究員)

成 田 秀 夫 (学校法人河合塾・教育イノベーション本部 開発研究職・講師  
東京大学 大学総合教育研究センター 共同研究員)

酒 井 淳 平 (立命館宇治高等学校)

佐々木 宏 (都立日野台高等学校)

〈設定趣旨〉

2014年以降、中等教育の分野でもアクティブ・ラーニングが注目を集め、授業改革の議論が活発化した一方、現在の日本の高等学校において、生徒の積極的な参加や思考を促すような授業が実際にどれほど展開されているのかを検証した調査研究は、これまで行われてこなかった。教育現場の実態を広範かつ客観的なデータに基づいて把握することのないままに、改革を叫んでよいだろうか。

この課題意識から、企画者らが所属する東京大学 大学総合教育研究センター 教育課程・方法開発部門では、2015年度に「高等学校における参加型学習に関する実態調査」を全国3,893校の高等学校を対象に実施し、62.0%に当たる2,414校より回答を得た。この調査を通して、①アクティブ・ラーニングへの取り組み状況、②実施されているアクティブ・ラーニング型授業の目的と効果、③アクティブ・ラーニング推進上の課題などが明らかになった。さらに、全国の高等学校のアクティブ・ラーニング型授業を見学し、担当教員にヒアリングを行う個別調査も、並行して実施している。

本ラウンドテーブルでは、上記の2種類の調査の結果を紹介しつつ、それを踏まえたうえで、実際に高校の教育現場でアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を実践している教師と調査担当者が、高等学校におけるアクティブ・ラーニング型授業の展開について議論を行う。とりわけ(1)アクティブ・ラーニングという言葉に包含される理念や教育方法とは何で、アクティブ・ラーニング型授業とそうでない授業の間は、どこで線引きが可能・必要なのか、(2)アクティブ・ラーニング型授業に取り組む教員の悩みや課題は何で、どのような克服方法があり得るのか、(3)生徒が主体的・意欲的に学び続ける姿勢を身につけることを支援するために、教師や学校ができること、また、大学や研究の立場からできることは何か、それぞれの立場から論じる。

10月2日(日) 15:30~17:00

ワークショップ①

## 授業逐語記録にもとづく比較授業分析

— イランの小学校の理科授業における教師の発問と児童の思考との関連を中心に —

(共通講義棟3階301講義室)

企画者

柴田好章(名古屋大学)

提案者

サルカールアラニ・モハメッドレザ(帝京大学)

久野弘幸(名古屋大学)

坂本将暢(愛知工業大学)

〈設定趣旨〉

本ワークショップでは、過去5年間の国際比較授業分析のワークショップの成果をもとにし、提案者らが協同して研究を進めている比較授業分析を行う。今回は、イランの小学校の理科授業の逐語記録と映像にもとづいて、比較授業分析を行い、異なる国の授業の共通性や差異を明らかにする。これを通して、文化を越えて互いに有益な知見を見いだすことをめざしている。

ワークショップでは、まず、提案者側から、分析対象授業の紹介を行う。そして、授業逐語記録を読み、参加者にも実際に比較授業分析を行ってもらい、意見交換をする。今回の授業分析では、児童発言の相互関連に着目する。

比較授業分析によって、国を超えて、授業あるいは学習という事象における共通する知見や課題が明らかになると予想される。また、両国の教育の制度や文化背景を考慮しつつ比較文化論的に考察することによって、授業の有する文化的固有性や共通性についても明らかになると予想される。また、異文化の接触によって、普段は気付きにくいわれわれの‘レンズ’を意識する機会にもなるだろう。参加者も交えてディスカッションを行い、授業という複雑な事象に対する研究アプローチのあり方を考えたい。

10月2日(日) 15:30~17:00

ワークショップ②

授業デザインに位置づく仮説生成模擬授業の体験

(共通講義棟3階305講義室)

企画者

小島 律子 (大阪教育大学名誉教授)

提案者

小林 佐知子 (畿央大学)

清村 百合子 (京都教育大学)

兼平 佳枝 (大阪教育大学)

高橋 澄代 (京都教育大学)

〈設定趣旨〉

現在、教員養成教育では実践的能力を養うことが重視され、教科教育法においても模擬授業を導入することが求められている。

私たちは、10年前から「仮説生成模擬授業」という新しい考え方に立つ模擬授業を開発し、学部生、院生、現場の教員、研究者を交えて実践してきた。「仮説生成模擬授業」とは、授業者の学習指導案を仮説とし、さまざまな立場の人が受け手となって参加し、授業を受けながらよりよい案を出し合い、出た案を即座に取り入れてやってみることで、仮説である学習指導案自体をつくりかえていく営みをいう。ここで案を実際にやってみることは、教育実践的な実験ということになる。やってみて、どちらがよいかを判断するのではなく、やってみることでまた新たな案(仮説)が生成されるところによさがある。「仮説生成模擬授業」の場合は、現実の教室ではないが、つねに理論と実践を往還させる実験室の役目を果たす。

「仮説生成模擬授業」は、学習指導案をスムーズに実践できるようにすることを目的とする旧来の模擬授業とは以下の3点において異なる。

- ①旧来の権威者と未熟者という関係がなくなり、実際やってみて受け手がどう感じるかが重要となる。授業者と指導者という上下関係がなくなり、だれもが平等に参加できる。
- ②授業者だけが利益を得るのではなく、授業者と受け手の両方が、授業づくりの新しい視点や授業の組み立てについて新しい見方を得ることができる。
- ③授業構成の表現といえる学習指導案を、教育実践的な「実験」によりつくりかえていくという点で、授業デザインの一環に位置づく。そして実際の授業を実践し、その記録を授業分析することで実験室での案の検証を行うことが可能となる。

当日、会場では、実際に参加者を受け手として「仮説生成模擬授業」を行い、このような研究方法についてご意見をいただきたいと考えている。

10月2日(日) 15:30~17:00

ワークショップ③

## 各教科における辞書を活用した 効果的な言語活動への取り組み(3)

(共通講義棟3階302講義室)

企画者

深谷圭助(中部大学)

提案者

外木一紗(帝京大学小学校)

木幡延彦(ベネッセコーポレーション)

〈設定趣旨〉

小学校中学年における辞書の使い方は、これまで、「限定的」であり、教科書の新出語、特に国語科教科書における新出語を調べさせるといった使い方に留まっている。

本ワークショップでは、小学校中学年ではなく、低学年で辞書を活用したことによる効果検証結果を理論背景とともに紹介し、低学年の児童の自主的な学習活動のなかに、辞書の活用がどのような形で、アクティブに位置づけられたかを、事例をもとに報告する。

事例として、公立の小学校で1学年から辞書の活用を指導した場合の学力(国語科ほか)の伸び方(データ)、そして、帝京大学小学校における、辞書の活用をきっかけにして、自ら学ぶようになった児童たちの様子を紹介する。

また、低学年から辞書を活用するための方法論(導入方法)を説明し、それを参加者に体験していただくワークショップを企画した。

本ワークショップが、各教科における辞書を活用した学習成果の向上に資することができればと考える。

## 日本教育方法学会刊行書籍

教育方法13.	いま授業で何が問われているか	1983	(2,472円)
教育方法14.	子どもの人間的自立と授業実践	1985	(2,940円)
教育方法16.	個性の開発と教師の力量	1987	(2,520円)
教育方法17.	教育方法を問い直す	1988	(3,045円)
教育方法18.	新教育課程と人間的感性の育成	1989	(2,039円)
教育方法19.	知育・徳育の構想と生活科の指導	1990	(1,794円)
教育方法20.	学校文化の創造と教育技術の課題	1991	(1,794円)
教育方法22.	いま、授業成立の原則を問う	1993	(1,896円)
教育方法23.	新しい学力観と教育実践	1994	(1,896円)
教育方法25.	戦後50年、いま学校を問い直す	1996	(1,998円)
教育方法26.	新しい学校像と教育改革	1997	(1,890円)
教育方法27.	新しい学校・学級づくりと授業改革	1998	(2,058円)
教育方法28.	教育課程・方法の改革 —新学習指導要領の教育方法学的検討—	1999	(1,953円) (価格は税込)

〒114-0023

東京都北区滝野川7-46-1

# 明治図書

TEL.(編)03-5907-6620

TEL.(営)048-256-2337

『教育方法』は、大会当日、会場にて大会割引価格にて販売いたします。

この機会に多数の方々のご購入をお願いいたします。

『教育方法29』より、図書文化から出版されることになりました。

教育方法29.	総合的学習と教科の基礎・基本	2000	(1,890円)
教育方法30.	学力観の再検討と授業改革	2001	(1,890円)
教育方法31.	子ども参加の学校と授業改革	2002	(1,995円)
教育方法32.	新しい学びと知の創造	2003	(1,995円)
教育方法33.	確かな学力と指導法の探求	2004	(1,995円)
教育方法34.	現代の教育課程改革と授業論の探求	2005	(1,995円)
教育方法35.	学習意欲を高める授業 —どのような学力を形成するか—	2006	(2,100円)
教育方法36.	リテラシーと授業改善 —PISAを契機とした現代リテラシー教育の探究—	2007	(2,100円)
教育方法37.	現代カリキュラム研究と教育方法学 —新学習指導要領・PISA型学力を問う—	2008	(2,100円)
教育方法38.	言語の力を育てる教育方法	2009	(2,100円)
教育方法39.	子どもの生活現実にとりくむ教育方法	2010	(2,100円)
教育方法40.	デジタルメディア時代の教育方法	2011	(2,100円)
教育方法41.	東日本大震災からの復興と教育方法：防災教育と原発問題	2012	(2,100円)
教育方法42.	教師の専門的力量と教育実践の課題	2013	(2,100円)
教育方法43.	授業研究と校内研修 —教師の成長と学校づくりのために—	2014	(2,100円)
教育方法44.	教育のグローバル化と道徳の「特別の教科」化	2015	(2,100円) (価格は税込)

最新刊・教育方法45.

### アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討

〈内 容〉

- I 教育改革のなかのアクティブ・ラーニング
- II アクティブ・ラーニングをめぐる理論的諸相
- III アクティブ・ラーニングの実践的展開
- IV 教育方法学の研究動向

〒112-0012

東京都文京区大塚1-4-5

# 図書文化

TEL. 03-3943-2516